

# 勝林寺

花のなかの奥様を

偲んで

仏婦老会員

七月二十五日は、前坊守様のご命日です。亡くなられて早やまる八年が過ぎました。

坊守さまからいたいた、お手紙を読み返し、ありし日のあのおやさしいお姿とやさしいおことばを、まのあたり思い浮かべたことでございます。

その一通。その年の六月十二日の日付のものです。



四月・五月は花の季節でございました。病院の一人部屋にいるわたしも、毎日のように見舞つてくださる方々からの沢山の花花に埋もれてこの季節を過ごさせていただきました。

お水さえうけつけないのに腹痛があります。

胆囊炎というところで、五月二十日にも緊急手術をいたしました。

次々にどうしてこんなに別の病がおこるのだろうと情けなくなります。

その情けないわたしが、この季節、花に埋もれて過ごさせていただけます。

すでに、お棺のなかに、花に埋もれたわたしを想像したりいたします。もつたいなことです。こんな因業愚痴なわたくしを、いろんな花花で莊嚴(しょうごん)してくださいます。

「一生の間 能く莊嚴せん」(あなたと縁を

むすび、友となり妻となつて、一生の間 あなたの人生をかざつてさしあげましよう)といふ如来様のお告げを聞かれた親鸞様のおしあわせていただいております。

アメリカの嫁からも、パークリエイの見事な四月の藤の花が写真で送つてまいりました。

## 五十年たつて親親と

門徒の一男性

一日

生田

俊雄氏宅法事

横山

伸三氏宅初盆

二日

デーサービス

四日

音話朗読録音

五日

友遊クラブ

六日

沢田定男氏宅初盆

七日

浜

薦氏宅初盆

弟が言うのです。「やめといたほえがいいのじゃない。あのおやじもおふくろさんも。わしらが無理して五十回忌の法事つとめたつて喜んでくれるどころか、いらんことするなって、どなるのが関の山だよ」

たしかにそうかも知れません。誰にいわせても、わたしの父と母、無類のシマリヤ、最高のケチンボウでありました。自分のところの田園と島でとれたもの以外は食べない。お金で物を買うなどということは一切しない。おわしら兄弟二人、そんな両親のやりかたに耐えられず、中学校であるなり家をおんでてしましました。「親らしいことは、ただの一度もしてもらつたことがない」という弟の言い分も、もつともだと思います。

しかしわたし、自分が親の歳に近付いたまま、つくづく親心を戴きなおしているこのごろです。

第一戦中戦後のあの時代です。あくらさなんたら生きていけん時代だったのあります。それともう一つ、うちの親は、ケチンボというより、ものの大きさ、勿体なさを人一倍知っていたのではないかと思います。

その証拠に、あんなボロ家に全く不似合いな金ぴか仏壇を大切に大切にしておりました。特別お寺のことは何をおいても夫婦つれだつて出掛け行きました。

してみると、あの人たちは、如來さまから恵まれた物を粗末にしてなるものかという、仏法第一、念佛第一のくらしだったのではないかと思います。

それというのも、法事勤めるに当たつて、お仏壇のお飾りの仕方などお寺に尋ねにまいりました。

「なにを供えてやつたらいいんでしょう。金だして何買つてきてもうちの先祖さんはあまり喜んでくれんと思いませんが」

すると院家さん「お淨土に参つてゐる人に、生前好きであったものを供えて上げて喜んでもらおうと思うのは、こちらの勝手な思い込み。祖先からすると迷惑至極のことにつちがいない。お経さ

## 八月のこよみ

一日

生田

俊雄氏宅法事

横山

伸三氏宅初盆

二日

デーサービス

四日

音話朗読録音

五日

友遊クラブ

六日

沢田定男氏宅初盆

七日

浜

薦氏宅初盆

十五日	大石正和氏宅初盆	中島武志氏宅・坂本智氏宅・湯口裕氏宅・湯口孝春氏宅初盆(午後)	△云法事	十一日	戦没者追悼于血蘭盆
十六日	十六夜会常例法座(本覚寺)			十二日	岩出和昭氏忌明初盆
十七日	デー・サービス			十三日	出石町内分盆参り
十八日	病院検診			十四日	過去帳学習会(別院)
十九日	友遊クラブ			二〇日	△こども研修会
二十日				二二日	森井勉氏宅初盆
二十一日				二四日	デー・サービス
二二日				二六日	過去帳学習会(別院)
二三日				二九日	人権啓発推進委員会(役場)
二四日				三〇日	人材育成講座(本山)
二五日				三一日	デー・サービス

## 八月二〇日(金)

受付 9:30  
開会 9:40

おつとめ 作法 ご法話  
ビデオ そばうち 工作  
町内寺めぐり など

こども1人700円(購入1000円)  
(三人1300円)

おとな1人500円

本堂・厨房修復につきてぜまな中でいろいろ工夫して実施します。  
一人でも多く参加してください。

評議員のみなさんへ

◎地区内のこどもをお誘いください。  
◎8月十七日までに参加者申し込んでください。

お水さえうけつけないのに腹痛があります。  
胆囊炎というところで、五月二十日にも緊急手術をいたしました。

次々にどうしてこんなに別の病がおこるのだろうと情けなくなります。  
その情けないわたしが、この季節、花に埋もれて過ごさせていただけます。  
すでに、お棺のなかに、花に埋もれたわたしを想像したりいたします。もつたいなことです。こんな因業愚痴なわたくしを、いろんな花花で莊嚴(しょうごん)してくださいます。

「一生の間 能く莊嚴せん」(あなたと縁を

まには《愛樂仏法味》いうて、お淨土にお参りしている人のこよない楽しみは、如來様のみおしえを聞き味わうこと。それしかないということです。法事つとめて、何を供えんでも、親をご縁に、お前がお念佛のおいわれを聞かしていただくこと、それが一番大切なことを思うがね」

## おかげさまのなかで

藤野すみこ

わたしは以前から、勝林寺さまのテレホン法話を「生活の鏡」として聞かせていただきたいことがあります。

六月一日からのご法話は、くしくもこのわたしが働かせていただいているお店の女あるじのことでした。その方が最後のねがい。

「もう一度元気になつて、人様のお役に立つようなことがしたい」

夫亡き後、女手ひとつで子育てに奮闘した年月、自立独立してお店の経営に身をけずる苦闘をかさねたこの二〇年—その間、いろんな形で共に歩んで来させていたいた私だけに、なんとも胸の痛くなる思いで聞いたことありました。

しかし一方、私よりずっと年若くして逝ったその人の死は、私にとってももちろん悲しいことではありましたが、正直いつてまた一方、苦労の中で立派に美しく育て上げた息子や娘、その他大勢の身内の手厚い看病のなかで、ここに静にお浄土にお帰りになられたその方を、「独り身」であるわたしは、ことのほか羨ましく思つたことか。

よく聞かせいただく、『白骨のご文書』さまざまのおことばが、今ほど、「死」ということが、他人事でなくこの身に滲て思われたことか。

「今日ともしらず明日ともしらず」「老少不定」

現実、私の最後のもろもろの世話を一体誰がしてくれるのだろうかなど、考えると、何ともいよいよこのない戦慄をさえ感じるのです。

ところが、今朝のことです。

その方を亡くしたお店に引き続いて働かせていただくようになつた私が、いつも通り慣れた道中に、正福寺さまのご本堂が見えたださる場所がございます。そこへ来るといつもの習慣で、合掌礼拝するわたしでしたが、

今日はちがいます。

「あ、一人ではなかつた。如来様はいつもこの私を、心配して、いつも見ていて下さっております。

つたのだ」

それからまた、幼稚園のそばをとおりかか

りました。なんと、いつものことですが、た

くさんの園児たちが、「シャインのおばちゃん！」と一齊に声をかけてくれます。

「ああ、独りじゃない。目には見えない無量のいのちに、よばれ支えられて、生かさ

れているわたしであつたのだ」

物心ついた時から、信心深いふた親に習つて、お仏壇の前に座つて両手合わせ事が、自然に身についた私ですが、「はかり知れないおおきないのちの中に、生かされて今日ある如来さまがついていてくださいます。親切な友人知人もたくさんいてくださいます。

その「おかげさま」のなかで、この歳になつても、独り身のわたしが、働く身のしあわせを、しみじみ思うこのごろです。

これからも、勝林寺さまのテレホン法話を「ここらの支え」として、聞かせていただきたいと思っております。どうぞお導きください。

「ここらの支え」として、聞かせていただきたいと思っております。どうぞお導きください。

「これからも、勝林寺さまのテレホン法話を

「きれいい水が出るぞ。」と明るい顔で帰ってきた。新たな簡易水道が引かれることになったというのだ。私は、あの涸れた家から水道水をもらうために、重いトルをひねると、おいしい澄んだ水ができる生活をつい最近、知ったことから、私の水に対する思いが変わつてきつある。わたしたちの流された役目であり、義務もある。家の水道の蛇口をひねると、おいしい澄んだ水ができる生活をつい最近、知ったことから、私の水に対する思いが変わつてきつある。わたしたちの流された生活排水。「湯水のごとく」ということは、あるように粗末に使つた水は、また私たちのものに還つてくるのだと思う。蛇口から出た水は、また長い道のりで蛇口にかえつくるのだ。

私の前にある一杯の水。これは、私自身のことを映し出す鏡でもある。

第二十一回全日本中学生「水」作文コンクール（国土庁主催）の最優秀文賞は、島根県温泉津中学校三年生、三明恵さんの『蛇口への道のり』にきました。

三明恵さんは、勝林寺前坊守の故郷瑞泉寺現住職の長女。

## 『蛇口への道のり』

わたしの家はお寺である。報恩講などの大きな行事の前には、一週間も前から天気予報がわが家の一大関心事となるのだ。

日本はとても豊かな水をもつた国だ。だが、蛇口をひねるときれいな水が出る暮らしは、私にとってつい最近まで縁どいものだつた。

わが家は四百五十年前に開山して以来ずっと山水を生活用水として使つている。もちろん飲用にもだ。だから雨の日になると濁る水には、深く響いたことはありませんでした。

蛇口をひねると、おいしい澄んだ水ができる生活をつい最近、知つたことから、私の水に対する思いが変わつてきつある。わたしたちの流された役目であり、義務もある。家の水道の蛇口をひねると、おいしい澄んだ水ができる生活をつい最近、知つたことから、私の水に対する思いが変わつてきつある。わたしたちの流された生活排水。「湯水のごとく」ということは、あるように粗末に使つた水は、また私たちのものに還つてくるのだと思う。蛇口から出た水は、また長い道のりで蛇口にかえつくるのだ。

私の前にある一杯の水。これは、私自身のことを映し出す鏡でもある。

。いつもは何げなく蛇口から使つていた水だが、この工事を通して、水はこんなに大切なもののかと思うようになり、水に対する関心も深まつていった。水源地から蛇口までみずを引いてくれた多くの人々の願いや努力を決して忘れてはならないとあらためて思った。

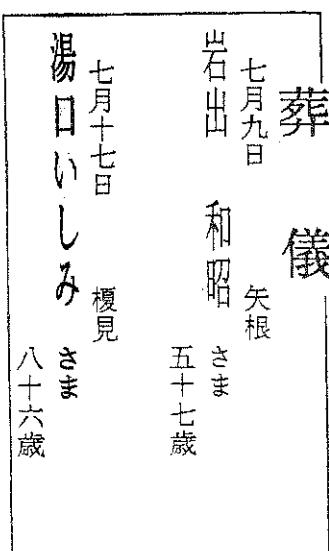
ところが、ある日、水が細い糸ぐらしか出なくなつてしまつたのだ。いくらひねつても少し水がでない。原因をさぐると、各家庭の水の使い過ぎにあつたようだ。水がいつでも出るうれしさもあったことだらう。

このことは私に、「水は限りある資源」であることを教えてくれた。

多くの緑に囲まれた私のふるさと。その緑が私の地区の水を作ってくれてもらつたのだ。地球規模で環境問題が叫ばれていて、私もできることがあるよう気がしてき

たのだ。森林を守り、河川に生活排水をできるだけ流さぬよう努め、ぬくもりや愛情の込められた水を大事に使って行くことが、私たちに与えられた役目であり、義務もある。家の水道の蛇口をひねると、おいしい澄んだ水ができる生活をつい最近、知つたことから、私の水に対する思いが変わつてきつある。わたしたちの流された生活排水。「湯水のごとく」ということは、あるように粗末に使つた水は、また私たちのものに還つてくるのだと思う。蛇口から出た水は、また長い道のりで蛇口にかえつくるのだ。

私の前にある一杯の水。これは、私自身のことを映し出す鏡でもある。



これからも、勝林寺さまのテレホン法話を

「ここらの支え」として、聞かせていただきたいと思っております。どうぞお導きください。

これからも、勝林寺さまのテレホン法話を

「きれいい水が出るぞ。」と明るい顔で帰ってきた。新たな簡易水道が引

かれることになったというのだ。私は、あの涸

れた水がもう蛇口からでてこないとと思うと嬉

しさがこみあげてきた。しかし、澄んだ水を手に

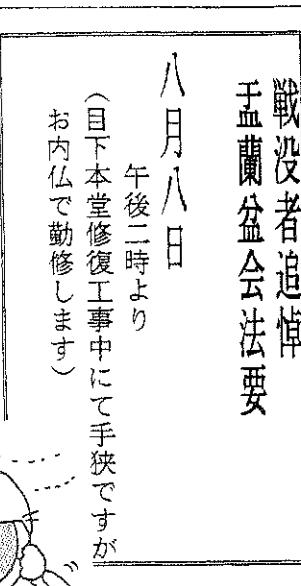
入れるために莫大な費用と、地域みんなの協

力が不可欠であるという。

工事が始まり、七十歳のおばあさんや、九十歳を過ぎたおじいさんまでが、寒さをこらえ、スコップを使い、水道会社の人とボースを引く作業が続いた。学校の行き帰り、その姿を見ながら、私はこの地域に住む人の、「雨の日でもきれいな水を」という思いを強く感じていた。

各家庭に給水が開始された日、初めて蛇口から出た水を私は生涯忘ることはないと、思えてくる。

水は日々の生活ではなくてはならないものだ



戦没者追悼  
千葉蘭盆会法要

八月八日 午後二時より  
(日下本堂修復工事中にて手狭ですが  
お内仏で勤修します)

